九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

紀海音の用語意識 : 韻律の観点から（下）

坂口, 至
宮崎大学教育学部講師

https://doi.org/10.15017/10435

出版情報：文獻探究. 19, pp.13-20, 1987-03-31. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

紀海音の用語意識 －韻律の観点から－（下）

坂口至

六

ロ、資料中に、同一語でありながら、何らかの理由によって拍数を異にする語形のユレを生じている場合

これには、形態変化の過渡期にあって語形がユレている場合と、しからざる場合とがあるようである。前者から見ていく。

【ラ行下二段活用とその四段化】

近世上方語における形態変化として、次項目や二段活用の一段化（これは韻律に関係しない）とともに、おなじみのものである。坂梨隆三氏（国語と国文学五二－一、昭五〇）山県浩氏（本誌一一、昭五八）などによって、解明しつくされたと言ってよいが、海音の実態は未報告である。まず、韻律に関係しない活用形もふくめて、比較資料の［狂］と［咄］の情況をあわせたものを一覧表にまとめてみよう。

		未然 下二	未然 四	連用 下二	連用 四	終止連体 下二	終止連体 四	已然 下二	已然 四	命令 下二	命令 四
シャルル（オッシャルルを含む）	［海］	2	5		6		10			4	21
	［狂］	2			8		8			1	6
	［咄］	2			8	1	3		1		17
メサルル	［海］	1		2		2	1			1	
	［狂］										1
	［咄］			1		2				2	3

		未然 下二	未然 四	連用 下二	連用 四	終止連体 下二	終止連体 四	已然 下二	已然 四	命令 下二	命令 四
ナサルル	［咄］	3		29		7					
	［狂］	6		87		20				1	31
	［海］	8		22		8	2			3	1
クダサルル	［咄］	1		25	4					4	14
	［狂］			13	2	3	1			1	31
	［海］			4	4	2				3	7

（表中、［海］は海音の世話浄瑠璃九篇を指す。［狂］の結果の大部分と各活用型の認定基準は、山県氏のものに全面的に拠っている。）

坂梨・山県両氏が、近松世話物浄瑠璃や絵入狂言本の調査で得られた四段化の進みぐあい、すなわちシャルル＞メサルル・クダサルル＞ナサルルの順序で四段化が進んでいることが、［海］や［咄］でも確認できること、右の表のとおりである。

さて、韻律との関係はどうか。問題となるのは終止連体・已然・命令の各形であるが、［海］の結果は二つの点で注目されよう。一つは、ナサルルの終止連体形に四段化したものが見られることである。

例／ただ〳〵なさると・嬉しうて／どうぞ物をは・いわせんと。／（『三井寺開帳』、一259）

／女房ぐるいを・なさるなら／うをもさだめて／まいるであらふ。／（『八百やお七』、三197）

これ以外に、時代物にも4例ほど見える(四115、四264、五144、六241)。[海]のI(韻律性の強い世話物五篇。前号参照)において、ナサルとナサルは、

例／ぬしと念比・なさるゝゆへ。／わたくしに迄・浅からぬ／(『今宮心中丸腰連理松』、一161)

のように、相扶的でなく、ナサルのほうがより適当な位置に、ナサルルが、許容される一拍の拍余りを利用してつかわれることが多い。それだけ、ナサルルの勢力がつよいわけであるが、右の第二例はナサルルでよいところに出たもので、いちはやい口頭語の露呈とみなしてよかろう(もっとも、『徳川時代言語の研究』一八六ページには既に四段化した当期の例が出ている)。第一例はナサルルを用いると、許容されない二拍の拍余りとなるところに、やむなく使ったものであろう。

二つめは、命令形に下二段のちからが、[狂]や[咄]にくらべるとなお強いということである。おそらく、これも韻律が密接に関係していると思われる。

例／お名がおしくば・いつ迄も／はじめの通に・おっしゃれい。／(『袂の白しぼり』、一145)

／まさしく是は・身が女房／外をお尋ね・なされいと。／(『心中二ッ腹帯』、六340)

これらの多くは、「拍足らず」の回避のための用法とおもわれるが、

例／内へ帰って・ねさっしゃれい／はやう〳〵と・いひけれは。／(『今宮心中丸腰連理松』、一168)

のような例もあり、口頭語から遠い用法とはかならずしも言えないようである。

【サ行下二段活用とその四段化】

鈴木丹士郎氏(国語学研究五、昭四〇)、奥村三雄氏(国語国文三六―一、昭四二)など研究がおおいが、やはり山県浩氏(本誌一〇、昭五七)がもっとも詳細である。まず、前項同様、一覧表から。なお、ここでは使役辞のみを扱い、スル・サスルを一括して出す。

	未然	連用	終止連体	已然	命令
	下二四	下二四	下二四	下二四	下二四
[海]	13	17	47	8	11	9	1		4	2
[狂]	9	13	33	31	3	9			1	1
[咄]	9	1	12	6	3	2			5	3

(サ)スル

(表中、[狂]の結果の大部分と、各活用型の認定基準は、やはり山県氏のものに全面的に拠っている。)

三者の中では、[狂]が四段化の一歩すすんだ情況をしめしているのがわかる。韻律に関係するのは、やはり終止連体・已然・命令の各形であるが、ラ行の場合と違って、下二段形と四段形はほとんど相扶的に用いられている。

例／文でしらせて・心よう／そはする様に・成ますと／(『袂の白しぼり』、一142)

／かけ落をさす・男めは／たれじや〳〵と・せめつくれは。／(『今宮心中丸腰連理松』、一162)

／其方様に・御出家を／やめさすからは・此方にも。／(『八百やお七』、三196)

韻律性のつよいIの中での例外は、次の一例だけである。

／こっに成共・なっかしき／顔に対面・致させよと。／(『八百やお七』、三200)

比較資料をかんがえあわせると、下二形と四段形は、当時の口頭語においても、拮抗して用いられていたのではないかと考えられる。

【謙譲丁寧助動詞マス　付ゴザンス】

謙譲丁寧の助動詞マスについては、本稿を草するきっかけとなった小文(本誌一〇、昭五七)でふれたことがある。

韻律に関係するのは、終止連体・命令の二形である。終止連体形では、新形マスと旧形マスルの出現数が、[海]では四五対三三、[狂]では一一三対一二、[咄]では一〇八対八七となっている。先の小文では、[狂]や西鶴浮世草子(一七八対三一)の数字をもとに、「マスルは口頭語の世界ではマスにくらべて劣勢ではあったが、多用することにそれほど抵抗を感じない底のものであったといえようか」としたが、[狂]の実態もかんがえれば、各資料の差異は、文体様式の違いにひとまず帰すべきで、口頭語の情況にただちに結び付けるのは危険なのかもしれない。

さて、[海]にもどり、韻律との関係を見ると、マスとマスルは、Iの五篇では完全に相扶的で、例外は皆無である。おそらく海音は、この両形を、書記言語としてはほとんど等価のものと意識していたのではないかと考えられる。

次に、命令形であるが、新形マセと旧形マセイの出現数は、[海]が一四対一、[狂]が一一三対一二、[咄]が一八対一七となっている。[狂]と[咄]は、終止連体形マス・マスルとの関係が平行的であるのがよくわかる。[海]は、マセイの用例が一例だけなので、相扶性が把握できないが、マセはIの五篇においては、例外なく韻律性をよりよく満たすようにもちいられている。

ところで、この助動詞マスは、「御座る」や「下さる(る)」などに下接して、語形変化をおこし、ゴザンスやクダサンスなどとなることがあったが、この場合も終止連体形において語形のユレを見せることがある(『徳川時代言語の研究』一六六～一六七ページなど参照)。ここでは比較的用例の多いゴザンスをとりあげる。

例/通ったやうで・どこやらが/いまだおぼこに・ござんすと。/(『袂の白しぼり』、一40)
/三かつ悦ひ・ゑがほして/成程そうで・ござんする。/(『二十五年忌』、五93)

韻律性の強いIの五篇では、ゴザンスが三例(助動詞マイ接続例を除く)、ゴザンスルが二例で、いずれも相扶的にもちいられている。ゴザンスルは、時代物での用例も少なくないが、やはり相扶的である。ところが、[狂]では一四例、[咄]では三例ゴザンスが見えるが、ゴザンスルの形はあらわれない。したがって、[海]におけるゴザンスルの用法は、「拍足らず」の回避のための用法と見るべきで、当時の口頭語においても、マスルと違って、ゴザンスルのちからは弱かったと考えられよう。

【助動詞ウ(ヨウ)とその短呼】

以下二項目は、近世に入って盛んとなり、現代でもおこなわれている形態上(音韻上というべきか)のユレについて。

まず、動詞などに助動詞ウ(ヨウ)が接続した言語形式と、それが短呼される場合との関係について見ていく。

『徳川時代言語の研究』(二七一～二八二ページ)によれば、助動詞ウ(ヨウ)の短呼現象は、当期には珍しいものではないことがわかるが、数量的な実態は不明である。ここでの比較資料で、まずその渇を癒すことにしよう。[狂]では、長呼と短呼が二三二対九、[咄]では二二五対二五という結果で、短呼率はそれぞれ四%弱、一〇%となっている。どういう場合に短呼されやすいかということも、ある程度傾向をつかむことができる。すなわち、単語でいうならば、丁寧助動詞マス、補助動詞アルに下接する場合が非常に多い。音韻上の特徴としては、活用語尾のあたまがラ行音の場合(アルをふくめてラ行四段動詞がほとんど)に多い。

これに対して、[海]では、長呼三一九例、短呼一五四例で、短呼率は三二%強となっており、[狂]や[咄]に比して断然たかい比率となっている。これが、韻律と関係深いことは予想されるところである。前号でこころみたように、I～IIIに九篇をわけてそれぞれに短呼情況を見てみる

と、Ⅰは一五七対九七(短呼率三八%強)、Ⅱは八七対三八(短呼率三〇%強)、Ⅲは七五対一九(短呼率二〇%強)となり、韻律性の弱いものほど短呼率は下がり、[咄]や[狂]の傾向に近づいていく(それでも差はおおきいが)。それでは、この長呼形と短呼形は韻律に関して相扶的であろうか。Ⅰの五篇では、全二五四例のうち、韻律をよりよく満たす用いられ方をしているのは二三四例(九二%強)で、ほぼ相扶的と言えそうである。次に例外を少しあげてみる。

例／おやのばちでも・行すへの／よからふやうには・思はれず／(『袂の白しぼり』、一57)

／又女房に・なされう共／毛頭かまひ・候はぬと／(『二十五年忌』、五72)

右の例は、助動詞ウのあとに体言や助詞がなおつづく場合で、助動詞ウで終止する場合よりも短呼しにくかったのかもしれない。その他に、男女の差もあったようで、短呼形の方がよりよく韻律をみたすべきところに、長呼形が出ている一九例のうち、一四例は男性話者のものである。つまり、女性の方がより抵抗なく短呼形をもちいる傾向にあるわけである。

さて、[海]、[狂]、[咄]の三資料をながめて、最後にどの資料が当期の口頭語の実態にもっとも近いだろうか。おそらく、[狂]や[咄]の結果、すなわち短呼率が低いのは、文体感情によるもので、実情としては時と場合に応じて[海]のようにしばしば短呼現象がおきていたのではなかろうか。

【レバ・デハなどとその融合形】

当期の係助詞ハや接続助詞バは、上接する音形式によっては、音融合をおこすことがままある(『徳川時代言語の研究』五三二～五三三、五九一ぺなど参照)。これにはさまざまな形式があるが、ここでは比較的用例の多いレバ(ラ行に活用する動詞助動詞＋バ)ネバ(ナ変・打消助動詞ズ＋バ)デハ(格助詞・断定助動詞・形容動詞＋ハ)ニハ(格助詞＋ハ)ズハ(打消助動詞ズ＋ハ)クハ(形容詞＋ハ)の六種を見てみたい。

まず比較資料であるが、融合形は、[狂]にはレバ→リャの一例しか見当たらない。[咄]でも、デハ→ヂャ四例、レバ→リャ一例、ズハ→ザ一例のあわせて六例のみで、これは全用例一七八のわずか三%強でしかない。ところが[海]では、レバ→リャ二七例、ネバ→ニャ三例、デハ→ヂャ一四例、ニハ→ニャ三例、ズハ→ザ一例、クハ→カ四例、合計五二例で、全用例四一五例に対しては、一二%強の融合率となっている。%は省略するが、これらの中ではレバ→リャとデハ→ヂャの融合率が比較的高い。これもまた、韻律に関係しているようである。Ⅰ～Ⅲでは、融合率だけ示せば、Ⅰ一六%強、Ⅱ八%強、Ⅲ九%弱で、やはり韻律性の強いⅠの五篇に融合形がおおくあらわれている。

次に、原形と融合形との相扶性であるが、Ⅰの五篇で見ると、韻律をよりよくみたす形で用いられているのは、全二一七例中一八五例(八五%強)で、例外はニハ一三例、レバ・ネバ・デハ各六例、クハ一例となっており、特にニハは当時まだ融合しにくいものだったことがわかる。

さて、前項同様口頭語との関係であるが、[狂]や[咄]と[海]の相違はやはり文体差と見るべきで、おそらく口頭語の世界では融合形がしばしば用いられていたことだろう。

七

ハ、資料中に、拍数を異にする二つ以上の読み方が可能な漢字書きまたはかな書きの言語形式がある場合

このうち、かな書きの場合は、前号でページを費やした助動詞ヨウの成立の問題が代表例で、その他には論ずるほどのものはない。

これに対して、漢字書きの場合は、挙げていけばきりがないほど多い。そして韻律性の強いⅠの五篇や同様の時代物においては、その多くは、

韻律を考慮することによって読みが一つに特定できるようである。以下、そのいくつかについて、読みと例文を示し、簡単な説明をくわえる。

(1)人称代名詞

①私《ワタクシ》

／りうぐはんかけた・私に／しめし給ふと・有がたく。／(『袂の白しぼり』、一45)

／私が名を・くださじと。／命にかゑての・親のじひ。／(『二ッ腹帯』、六336)

〈ワタシ〉はまだ現れていないようである。

②其方《ソノホウ》

／扨其方は・云ごとく。／町人の気に・なりぬいて。／(『二ッ腹帯』、六337)

／町人にして・其方が／あんをんなれとの・御哀み。／(『二ッ腹帯』、六338)

〈ソナタ〉は必ずかな書きにされる。

(2)時

③今日《コンニチ》

／ハア藤七殿・今日は。／きどくとお宿に・ござんする。／(『袂の白しぼり』、一33)

／道もわすれず・今日の／御参詣は・きどく也。／(『八百やお七』、三188)

④今朝《コンチョウ》

／幸今朝・下りたる／そめ物おふく・ある中に。／(『袂の白しぼり』、一34)

／其義によつて・今朝より／御役所へ・召つれ出。／(『二ッ腹帯』、六330)

⑤明日《ミョウニチ》

／立帰て・明日は／ほっしんするぞ・ふっ〳〵と。／(『八百やお七』、三209)

／平野や殿から・明日は／ふるまいをする・半兵衛に。／(『二ッ腹帯』、六350)

以上の和語形〈キョウ〉・〈ケサ〉・〈アス(アシタ)〉は、いずれもかな書きでもちいられる。

⑥晦日《ツゴモリ》

／急度霜月・晦日に／かねをすまして・見せませう。／(『二十五年忌』、五73)

(3)その他

⑦日本《ニッポン》

／神代この方・日本の／掟と定る・手形をば。／(『傾城国性爺』、三293)

／たった今まで・日本に／そちよりかわい・物ないと。／(『殺生石』、四142)

〈ニホン〉とよむべきところは見当たらない。次も同様である。

⑧日本一《ニッポンイチ》

／二人は恋の・中宿に／日本一の・首尾なれど。(『袂の白しぼり』、一39地の文)

／日本一の・ちやうじやの身も／こもをかぶる・こつじきも。／(『二十五年忌』、五92)

⑨本尊《ホゾン》

／本尊〳〵の・おかゞみも。／三か月さまの・おそなへも／(『袂の白しぼり』、一39)

／まもり本尊の・御ほうべん。／かならずせんぎ・御無用と／(『袂の白しぼり』、一47)

⑩参宮《サング》

／おぢ坊様は・るすそふな。／さだめてさん宮で・ござんしょと／（『袂の白しぼり』、一39）

／又御さん宮の・悦に／人でもあげます・はづなるを。／（『袂の白しぼり』、一43）

〈サングウ〉と読ませるときは、ルビで明示する（五342）。

なお、この他に、多くの読みを有する漢字で、そのうちの特定の読みだけを原則として排除している場合がある。

⑪御《ゴ（ギョ）・オン》

／取つくらふが・くせ事とて／むすぶの神の・御とがめ。／（『袂の白しぼり』、一45）

／まださま〴〵の・ふしぎな事／あなたへ直に・御きゝと。／（『袂の白しぼり』、一45）

《ゴ》と読む例は、右の⑨⑩などの例文を参照されたい。漢語が下接する場合には《ゴ（ギョ）》、和語が下接する場合には《オン》となるわけである。〈オ〉は、特に『袂の白しぼり』などでは、かな書きが原則である。

ところで、この「御」の読みに関しては、いわゆる「捨て仮名」と密接に関係しているようである。いくつか例をあげてみる。

／ひなかたかいて・跡よりも／御〵めにかけん・去ながら。／（『袂の白しぼり』、一35）

／法印様は・やう〳〵と／やぜん伊せから・御〵下向。／（『袂の白しぼり』、一45）

前の例は、韻律の関係から上のように読ませようとしたが、「御め」という字面では、一般的に「オメニ～」と読まれやすいので捨て仮名をもちいたのだろう。また、後の例も、「拍足らず」を回避するため「オン～」としたが、漢語の前の「御」はゴ・ギョと読むのが普通だから、やはり捨て仮名で読みを明示したものであろう。

なお、以上は読みが特定できるものであるが、一女房（ニョウボと読むのが適当な場合が多いが、ニョウボウと読まざるをえないところもある）や「出す」（ダス・イダス）のように、特定できないものも若干ある。

八

ニ、資料中に、韻律が関与していると予想されるある種の文法的破格がある場合

文法的破格で目につくのは、当時の口頭語とほとんど関係しないが、「係り結び」におけるそれである。なおいずれも地の文の例である。

例／ねもせぬうちに・むつごとの。／心だくみぞ・はかなけれ。（『八百やお七』、三204）

／あまる涙も・しのびあふ／めうとの義理ぞ・せつなけれ。／（『二十五年忌』、五90）

／しゝさうぜうの・太刀をはき／しやうでんするこそ・いかめしき。／（『殺生石』、四145）

／詞をそこに・にごらする／心の内こそ・やるせなき。（『呉越軍談』、六78）

前二者は「拍足らず」、後二者は「拍余り」を回避するための破格であろう。もっとも、この「係り結び」の破格は、韻律と無関係のところでも、しばしば見られるので、さほど強調して論ずるほどのことでもない。

以下は、目についたままに、列挙する。

例／ぬしにも寺の・おれいさへ／けふつとめらる・やうな事。／（『袂の白しぼり』、一43）

／すみかとさだむ・宿もなく。／うろ霜雪に・身をいため／（『八百やお七』、三198）

次の例は、該当箇所が意味不明であるが、韻律に関係していることはまちがいないだろう。

例／衣におつる・涙こそ／二人が。袖にわかるゝじ。／（『八百やお七』

ホ、その他　　九

ここでは、使用例はそれほど多くないが韻律と密接に関係しているとおもわれる用語と、韻律の書誌の方面への寄与について見ておきたい。

前者は、次のようなもので、いずれも、もっぱら「拍足らず」の回避のために用いられているものと考えられる。

【意志推量助動詞ウズ】

この助動詞は、当期においてはほとんど衰退していたもののようである（『徳川時代言語の研究』二八六～二八七ぺ）。なお、［狂］にも一例だけ見える。

例／ちかい内には・おまへも又／御宿へ御帰り・なされうず。／（『二十五年忌』、五77）

／あらしにふかれ・雨にぬれ。／れいのきやみも・おこらふず／（『殺生石』、四165）

【サ行四段動詞の下二段化】

これについては、『徳川時代言語の研究』（八〇～八一ぺ）のほか、第六節のサ行下二段動詞の四段化のところで出した鈴木・山県両氏の論考に言及がある。［狂］や［咄］には見られないようである。「暮らす」「落とす」の例をあげる。なお時代物に比較的おおい。

例／ことにやもめで・くらすれば／是さいはいと・談合し。／（『今宮心中丸腰連理松』、一160）

／手をはなすな・おとするな／はやう〳〵と・おし立れば／（『三井寺開帳』、一264）

【シク活用形容詞終止形－シシ】

これもよく知られた現象なので、例だけあげる。

例／未来の程は・たのもしゝ／今こそ顔を・見おさめと。／（『今宮心中丸腰連理松』、一180）

／君けいせいの・有さまは／見くるしし・けがらはし。／（『三井寺開帳』、一245）

【接続助詞シ】

打消助動詞ズに下接して、シテと同じ意味をあらわすものである。『徳川時代言語の研究』（五一〇ぺ）では、古浄瑠璃や歌舞伎の地の文などにあらわれるとしているが、海音の資料では会話文にまま見られる。

例／それをそれとも・思はずし／親の心に・背こと。／（『三井寺開帳』、一256）

／それ共ねがひ・かなわずし／辻かいもとで・死ぬる共。／（『二ッ腹帯』、六355）

次に、後者について。小学館版日本古典文学全集『浄瑠璃集』の頭注（横山正氏）を見ると、海音の作品の板本による校異がかなりこまかくしるしてある。これらの内いくつかは、韻律上の操作によって、海音の原稿ではこうあったのではないかと推定できそうである。以下、海音全集の本文をまずあげ、他のものと比較判定してみる。

例／是藤七殿。・私も／正月小袖・日の加賀の／もろ白がより・羽二重の。／（『袂の白しぼり』、一38）

九行本には「日」がないとのことであるが、なければ「拍足らず」となり、不可である。

／むりは三度じや・おきなしや。／サア見よ〳〵と・立よるを／（『袂の白しぼり』、一46）

該当部分は、「置き成す」の命令表現としかとれないが、それでは「拍足らず」となり不可。九行本に「置なをしや」とあるのを採用すべきである。意味の上からも自然である。

／あちらへむけば・向ふから。／又其顔が・によつと出ル／こちら

へよれば・うしろから。／（『八百やお七』、三一九〇）

底本などの七行本以外は、「によっと」がないとのことであるが、やはり「拍足らず」となり不可である。

／云ても御合点・ないならば／無理に吉三を・引出そと／太左と身共・両人が／しめし合て・置ました。／（『八百やお七』、三一九五）

該当部分、八、九行本は「そ」に濁点があるとのこと。底本は「ヒキダソト」、八、九行本は「ヒキダスゾト」となり、前者がよりよく韻律をみたしている。意味の上からも問題ない。

十

以上、韻律の観点から、紀海音の用語意識を縷々述べてきた。内容を欲張ったため、個々の事象の分析がおおざっぱなものとなったことを遺憾とする。それらの中には、活用の型変化の問題など、独立の論文としてなお詳しく分析すべきものも少なくない。いずれ稿をととのえる機会を得たいとおもう。また、用例に遺漏のすくなからぬことを恐れる。

本稿では、浄瑠璃作者の代表格としての近松の用語については、意識的に言及するのを避けた。先の小文でも述べたが、近松は浄瑠璃詞章の韻律性に囚われすぎる作者を難じている（稿者には海音をゆびさしているとほか考えられない）が、通読したところでは、やはり韻律に対するこまかな配慮があちこちに見受けられる。時には海音とまったくおなじ方針でのぞんだと思われる用語もあるようである。これもまた、後の機会に分析してみたくおもう。

（完）

宮崎大学教育学部講師

◎研究余滴

佐賀方言の「動作進行態」と「状態継続態」

江口泰生

西日本の大部分でそうである様に、佐賀方言でも「動作進行態」と「状態継続態」を区別する。

小野志真男氏の佐賀方言の区画（例えば、『九州地方の方言』所収「佐賀県の方言」国書刊行会　昭和五十八年三月）によれば、「動作進行態」は、佐賀東部地区（三養基郡・神崎郡・佐賀郡・佐賀市・小城郡）等では「カキヨッ」・「フイヨッ」、佐賀西部地区（多久市・杵島郡・武雄市・伊万里市・西松浦郡・藤津郡・鹿島市・太良町）では「カキヨー」・「フイヨー」、一方、「状態継続態」は、佐賀東部・西部共に「タットッ」・「タットー」（立っている）という分布を示すという。

つまり、「動作進行態」と「状態継続態」が、佐賀東部では、「ヨル」・「トル」の対立であるが、佐賀西部では「オル」・「トル」の対立で示されるという事になる。「動作進行態」の形態的な相違が存するという事である。

佐賀東部と佐賀西部の「動作進行態」の違いは、単に形態的な違いであり、文法的な意味はないのであるが、この形態的な違いが方言区画の一つの指標として用いられているとすれば、この対立が生じた原因を考えてみる事も決して無意味ではないと言えるであろう。はたして、この様な形態的な違いは何によって生じたものであろうか。

蒲原大蔵の『伊勢道中不案内記』（天保元年に初編、嘉永末までに完結）は、佐賀の戯作文学の中で最も大部な作品である。しかも佐賀方言を大量に収録している事によって、江戸時代末期の佐賀方言を知るうえでの貴重な方言資料と言える。しかしながら、公刊された活字本（肥前史談会古書刊行部　昭和三年十二月）が、研究上のテキストとしては必ずしも良いものでなかったため、これまで、佐賀の戯作文学の作品を材料にして、幕末期の佐賀方言について論文を発表し続けてきた篠崎久躬氏

（33ページに続く）